# 初期須恵器窯の解釈をめぐって

植野浩三

## はじめに

初期須恵器の名称は、「日本で須恵器生産が開始されたときから、地方窯が成立するまでの最初の数十年間、須恵器は陶邑とその周辺から、一元的に供給されていたということができる。そこで、この限られた時期の須恵器を一括して、初期須恵器と呼ぶことにする」[1]。「初期須恵器とは、TK七三、TK二一六、TK二〇八の各型式に属する須恵器の総称ということになる」[2]として、田辺昭三氏が最初に定義したことは、周知の事実である。

この定義の根底には、陶邑古窯跡群の調査成果と、地方窯の調査・検討から導き出された、社会・政治史的な点を重視して説いているといえる。事実、一九六〇年代には、陶邑古窯跡群（以下陶邑窯とする）・一須賀窯跡を除いては、TK二〇八型式に遡る窯跡は発見されていなかったのである。

しかし、この名称は、地方窯の上限を一つの基準にしたため、その後の調査が進展していくなかで、かなりの矛盾を生んだことも確かである。それは、宮城県大蓮寺窯跡[3]、愛知県東山二一八—I（四八）号窯跡[4]、同県城山二・三号窯跡[5]、香川県宮山窯跡[6]などの、TK二〇八型式もしくはそれにやや先行する地方窯の発見であり、地方窯出現の上限時期の修正が必要になってきた。

またその後も、愛知県東山一一一号窯跡[7]と、香川県三郎池西窯跡[8]、福岡県小隈・山隈・八並窯跡[9]などの、さらに古段階に遡る可能性のある須恵器窯の発見が相次いでなされ、「初期須恵器」の概念に含まれている「一元的な供給」に対して、再検討を求める動きが表面化してきた。特に、これらの地方窯跡出土の須恵器のなかに、陶邑窯とは異なる形態・技法を有するものが存在することから、地方窯の成立は、これまでのように全てが陶邑窯を経由することなく、朝鮮半島から直接的に渡来した工人によって生産が開始され、日本における須恵器生産が「多元的」に行われたとする「多元論」が提唱されるに至ったのである[10]。

確かに、北部九州における窯跡推定地採集品および一部調査出土の遺物は[11]、陶邑窯の最古段階の一群と比較して、形態・技法の面でかなりの違いをみせている。しかし、このことが、他地域の窯跡群に全て当てはまるといったことはかなりの論議が必要であるし、詳細な検討を要する最大の課題といえよう。

また、「多元論」とは、系譜的な点を問題にするのか、上限の問題を再論議するのか、あるいは「初期須恵器」と呼ばれる段階の窯跡の存在のみを指摘するのかと言った問題が不明瞭であるといえる。したがって、小稿では、「多元論」について整理して、はたしてすべての初期須恵器窯が陶邑窯と系譜を異にするのかといった点に焦点を絞って、各窯跡の出土遺物の検討を通して、その是非について考えることを目的とする。

## 一、初期須恵器の名称と「多元論」

各地域で初期に遡る須恵器窯跡の発見、ならびに「多元論」の提唱は、「初期須恵器」の概念の訂正を迫るとともに、場合によっては、その名称そのものを失いかねない要素をもっている。それは、「初期須恵器」の名称が、陶邑窯の一元的な供給を基本的な内容として出発したためであり、仮に、「多元的」と呼ばれる生産が一般的な場合には、それは、これまでの「初期須恵器」の概念では、当てはまらないということになるのである。

こうした概念の整理は、基本的なことである。少なくとも、一元的な供給を基礎に据えるかぎりにおいては、さらに矛盾を生む結果になるため、切り放して考えたほうが有効であると考える。

こうした点を考慮して、筆者は、「初期という限られた期間を設定する場合、初期須恵器とは、定型化前の須恵器、つまり日本で須恵器生産が開始し、規格化されるまでの須恵器（TK七三・TK二一六型式）としたほうが妥当であると考えられる」[12]として、「初期須恵器」を技術的側面から据えて定義することを提唱したことがある。第一に、生産における変革点を重視して区別し、初期須恵器の範囲を囲んだのであった。

この方向性は、後に田辺氏も「須恵器の定型化をもって初期須恵器の終焉とするなら、厳密に言えばTK二〇八型式の前半段階までを初期須恵器の範囲とするのが適当である」[13]とするように、今日における一つの基準になりつつある。

このように、「初期須恵器」の定義は、単に古相というだけでは不充分といえる。初期という限られた期間の須恵器が、その後の須恵器の比較して明確に区別でき、その特質を示していることが重要といえる。こうした点において、製作技術の向上と、技術水準の平均化を示す時期は、初期を画する最大の指標になると考えられる。

しかし一方では、「初期須恵器」の用語は、陶邑窯で見られる変化・変遷を基にするのであって、地方窯が陶邑窯とは系譜を異にして成立し、発展するという説においては、これは当てはまらないとする見解

第１表　初期須恵器の段階の窯跡

| 窯跡名 | 所在地 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 陶邑古窯跡群 | 大阪府堺市・和泉市・岸和田市・狭山町 | ＴＫ73～ | |
| 一須賀２号窯跡 | 大阪府南河内郡河南町東山 | ＴＫ73 | |
| 吹田３２号窯跡 | 大阪府吹田市朝日が丘 | | |
| 大蓮寺窯跡 | 宮城県仙台市原町 | ＯＮ46 | |
| 東山１１１号窯跡 | 愛知県名古屋市昭和区伊勝町 | ＯＮ46 | |
| 東山218－1号窯跡 | 愛知県名古屋市千種区稲船通 | ＯＮ46 | |
| 三郎池西窯跡 | 香川県高松市南奥 | | |
| 宮山窯跡 | 香川県三豊郡豊中町比地大 | ＯＮ46 | |
| 小隈窯跡 | 福岡県朝倉郡夜須町下高場 | | 採集・一部調査 |
| 山隈窯跡 | 福岡県朝倉郡三輪町山隈 | | 採集 |
| 八並窯跡 | 福岡県朝倉郡夜須町三並 | | 採集 |

も出てこよう。しかし、それは、日本における須恵器生産が、陶邑窯を中心に展開することを考えれば、必ずしも否定されるべきものではないし、事実、次節以降で述べる各地の地方窯の須恵器をみても、かなりの共通性が認められ、おそらく、陶邑窯の主導的な存在が想定できるのである。

小稿では、こうし定義の上にたって、以下「初期須恵器」の名称を用いるが、「初期須恵器」の特質は、地方窯の成立のあり方も加味されなければならないと考えている。そうした点においても、「多元論」の是非は、重要な方向性を担っているのである。

## 二、「多元論」の現状

初期須恵器が、陶邑窯から各地へ一元的に供給されていたとする見解に対して、この期における須恵器生産は、陶邑窯とは系譜を異にした、渡来の工人によって多発的に開始されたとする「多元論」が提唱されたことは、小稿の初めに述べたとおりである。

この「多元論」の主要な根拠は、各地域の窯跡出土の須恵器のなかに、陶邑窯とは異なる形態・技法・意匠をもつ一群が存在していることである。本項では、その諸説について簡単に紹介し、「多元論」の現状について考えてみたい。

その代表的な例は、福岡県小隈・山隈・八並窯跡であろう。これら

の窯跡は、充分な調査がなされていないため、その全容は不明であるが、採集された遺物は、同県池の上・古寺墳墓群、茶臼塚古墳などで出土した陶質土器・須恵器の甕・壷などと共通した特徴をもつ点で知られており、明らかに陶邑窯とは違った形態を有するものであること[14]は間違いない。橋口達也氏はこの点について、「陶邑で須恵器生産が開始された頃、少なくとも北部九州でも須恵器が生産され始めていた。この一つをとっても須恵器生産が一元的なものではなかったことは明らかである」[15]として、陶邑窯の初期に遡る須恵器と同時期に地方窯が存在する可能性を基に、須恵器生産の「多元的な開始」を説いている。

一方、斉藤孝正氏は、愛知県東山一一一号窯の調査と、出土した須恵器を検討するなかで、陶邑窯の須恵器にはみられない特徴として、（一）杯の口縁部の立ち上がりが長い点、（二）器台脚部が丸みをもち、下部が強く外方へ屈曲する点、（三）無蓋高杯の透かし孔が多い点、（四）甕体部外面に凹線文を施す点を指摘した。そして、東山一一一号窯は、「大阪府一須賀二号窯（中略）、大蓮寺窯跡と同様に（中略）、陶邑窯とは異なる系譜に連なる可能性が強く、凹線文の存在から大蓮寺窯跡との関係が注目される」[16]として、陶邑窯とは全く違った系譜の製品であると述べ、地方窯の成立過程が必ずしも陶邑窯を経由していない点を説いている。

また、香川県三郎池西窯跡を調査した松本敏三氏は、同窯跡出土の高杯の脚部の形態と、甕底部の製作技術が陶邑窯とは違ったあり方を示すとしている。そして、同県宮山窯跡とともに、これらの須恵器工人は、陶邑窯から派遣されたものではないと推定される[17]として系譜の違いを述べている。

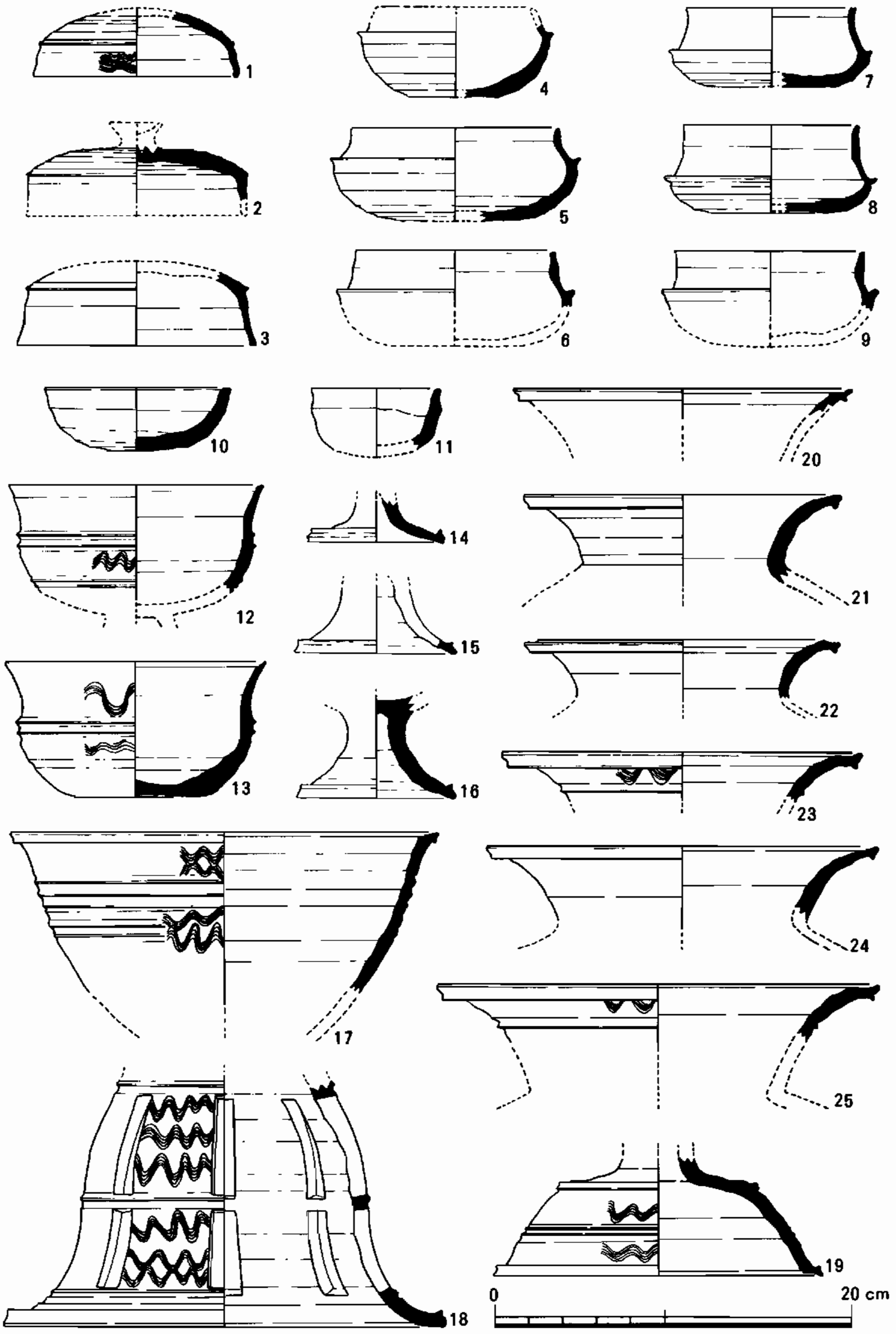
宮城県大蓮寺窯跡については、斉藤氏も少し触れているが、中村浩氏も同様に、少なくとも陶邑窯とは異なる系譜に連なるものであることは想像されるとして、叩き目の違いを留意する必要性を説いている。[18]

以上の例が、陶邑窯とは違った形態・技法の存在を説く代表的なものといえるが、確かに報告者が指摘するように、陶邑窯では確認されていない手法が存在することは確かである。この事実が系譜を異にするという「多元論」の重要な根拠になっているのである。

また、近年になって、岩崎直也氏は、各地の須恵器生産の始まりは、すべてが陶邑窯と系譜を異にして、多元的に行われたとされている。地方窯出土須恵器の微妙な差異は、殆どが朝鮮半島での地域的な差異に連なるという[19]、大胆な論を展開している。

「多元論」の根拠は右に述べたとおりであるが、論としての説明は詳しくされているとは言い難い。須恵器生産の開始期における、陶邑窯からの一元的な供給ということに対して、「多元的」という名称を用い、陶邑窯とは違った形態・技法の須恵器が存在することから、系譜の違う工人による窯の成立を説いていることだけは明らかである。

「一元的」という言葉が「供給」に使われているに対して、「多元」は「生産」に付されているといえるが、概ね以上のような点に整理で




第１図　東山111号窯跡出土の須恵器（註７文献より　一部筆者補正）

きるといえよう。しかし、一つだけ留意しておかなければならないのは、初期須恵器の段階に多くの地方窯が成立しているということと、窯の成立が異系譜・同一系譜という問題は区別しておかなければならないのである。たとえば、「一元的」に対する「多元的」は、供給の面について言えば、系譜の差異を論議しなくても成り立つし、仮に陶邑窯と同系譜であった場合には、誤解を招く恐れがあるからである。

## 三、陶邑窯との共通点

「多元論」の主要な内容である工人の系譜の違いと、その生産の開始は、古墳時代の文物・技術の導入のあり方を説く重要な手掛かりといえよう。この時代の技術の導入は、須恵器生産に留まらず多岐にわたるが、こうした状況を詳細に検討することは、対外交渉史を組み立てる上で不可欠の問題なのである。そうした点において、須恵器生産成立期における工人の渡来と、その系譜をそれぞれ異にして成立するといったことは、詳細に検討されなければならない事例の一つであることはいうまでもない。

陶邑窯と系譜を異にして生産が開始されたとするものは、前掲したとおりであるが、少なくとも、北部九州のものについては、形態・技法の面から見てもその可能性は否定できない。しかし、その他の窯跡についてみると、陶邑窯にはない特徴は盛んに主張・強調されているといえるが、同一窯跡から出土した他の要素の関連性については、さほど理解がされていないのが現状であろう。他の要素としたもののなかには、陶邑窯と共通した特徴をもつものもかなり含まれている場合が多く存在し、異系譜とするには、再検討を要するのである。

まず、愛知県東山一一一号窯跡の須恵器をみてみよう。東山一一一号窯跡で出土した杯は（第一図）、斉藤氏も述べられているように大きく四類に分類できる。それは、

A、小型で丸みをもつ深い体部に、短い受部と内傾する口縁部を付けるもの（第一図―四）。

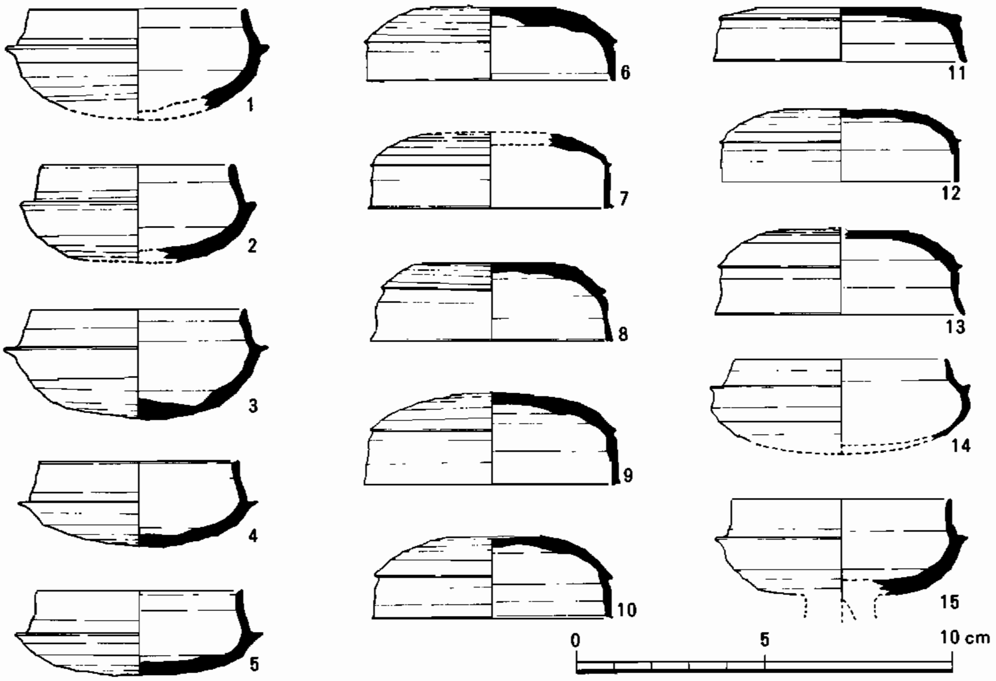
B、内傾する口縁部に、膨らみのある体部を付けるもの（第一図―五）。

C、浅く平らぎみの体部に、長めの立ち上がりを付けるもの（第一図―七・八）。

D、B類とC類の中間形態を示すものである。

これらの四類は、筆者は多少の時間差をもって存在した可能性が強いと考えるが、それは別にしても、A・B類およびD類としたものは、陶邑窯においても確実に存在している器形といえるのである。また、C類とした口縁部が長くなるのも、陶邑窯においてよく似た傾向を示すものがある。

第二図は、陶邑窯跡出土の須恵器である。TK二一六、ON四六号窯跡出土の遺物を中心に掲示しているが、第一図と比較していただき




第２図　陶邑窯跡・東山218―Ｉ号窯跡の須恵器（１・２・６陶邑ＴＫ216号窯跡、２～５・７～10陶邑ＯＮ46号窯跡、11～15東山218―１号窯跡山土）

たい。杯の形態を見ると、東山二一一号窯のＡ・Ｂ類（第一図四・五）としたものは、ＴＫ二一六型式のもの（第二図―一・二）によく似ているし、Ｃ・Ｄ類の立ち上がりが高くなる傾向は、ＯＮ四六号窯のものにかなり類似している。蓋においても、口縁部が長くなる点は両者とも同じである。ＯＮ四六号窯跡の須恵器は、口縁端部に面をもたせるものと、浅く沈線状に窪ませるものがあるが、この特徴はＣ・Ｄ類と共通している。一方、ＴＫ二一六号窯の端部を丸く厚めに仕上げるものは、Ａ・Ｂ類と共通する。

外面に施された箆削りは、不定方向のものもあるが、回転箆削りは幅の狭い、比較的緩い回転のものが多い。また、内面の仕上げ撫では、不定方向に、広範囲に丁寧に施すものが多く、両者に共通している。

このように見てみると、東山二一一号窯の須恵器は、陶邑窯とかなり共通した特徴をもっていることが解る。特にＡ・Ｂ類としたものは、ＴＫ二一六型式の須恵器とより共通する特徴をもっている。異なる特徴をもつ一方で、こうした共通する特徴をもつことは、単に系譜の違いとして即断するには、再検討を要するといえよう。

さらに、東山二一一号窯を考える場合は、直線距離で北方に約七〇〇メートルの地点に存在する、東山二一八―Ｉ（四八）号窯をあわせて考えなくてはならない。同窯跡は、二一一号窯より後出すると言う見解もあるが、筆者は、同一型式のなかでと捉えても差しつかえないと考えている。蓋杯の形態は、二一一号窯のＢ類と共通するもの

と、C・D類に近い傾向を示すものとがある。第二図―一二は、ON四六号窯のもの（第二図―七〜九）に形態的に類似していることが解るし、箆削り・撫での特徴も共通している。こうした点をみても、東山一一・二一八号窯の須恵器は、陶邑窯とかなり類似していることが解る。

もちろん、蓋杯をみても全てが共通するわけではない。一一一号窯のC類とした、極端に立ち上がりの長いものは他に例をみないし、多少の差異は存在している。しかし、そうしたことは、時間的な経過として捉えられるし、工人差・地域差といったものが芽ばえ始めていたと解釈できるのである。少なくとも、東山窯ではそうしたことが言えるのでないかと考えている。

これまで陶邑窯とは違った形態・技法を有するとされてきた窯跡も、このようにしてみると、同じ窯内よりかなり陶邑窯と類似した一群の須恵器が存在していることが解る。同じことは、宮城県大蓮寺窯跡出土の甕・器台、また、香川県宮山窯跡出土の蓋杯でも言えることであり、単に陶邑窯との系譜の違いで説明するには無理があると考えられる。須恵器の一部の器形のみが別系譜で、他のものは陶邑窯との関係で考えることは、矛盾しているのである。筆者は、逆にこうした共通性をどう説明するかを問題にしたいのである。両者の特徴の整理と、および、それを含めた総合的な検討によって、地方窯の成立や、系譜の問題を論議するのが望ましい姿といえるし、一部の特徴のみを取り出して位置付けるのは控えなくてはならないのである。

## 四、「多元論」の修正

前節で述べてきたように、各地の須恵器窯は陶邑窯とは系譜を異にして、直接的に朝鮮半島から渡来した工人によって成立したという根拠は、出土遺物の総合的な検討によって、修正が必要になってきた。少なくとも、これまでの窯跡出土の須恵器は、系譜を異にするのではなく、陶邑窯を含めた国内からの影響が強いと考えられるのである。また国内からの影響という点は別にしても、蓋杯に見られた特徴は、日本で一定期間経過した段階のものであることが言え、直接的に朝鮮半島に由来するものではないことは確実である。

一方、これまで述べてきた見解と同様に、陶質土器と須恵器の器種構成の問題から、従来の「多元論」に疑問を投げ掛けるものもある。

山田邦和氏によれば、朝鮮半島伽耶・新羅の陶質土器は、有蓋の高杯を主に供膳用土器として用い、蓋杯の占める割合はごく僅かな率であるという。それに対して、陶邑・高蔵七三号窯の段階では、既に蓋杯が供膳用土器として、主流を占めつつあるという。このあり方は、陶邑・高蔵七三号窯がすでに日本化した段階のものであり、同様に、蓋杯の出土を認める東山一一一号窯跡の須恵器についても、日本化した段階のものとし、直接的に朝鮮半島に系譜を求めるべきものではないという。そして、東山一一一号窯跡の系譜は、宮城県大蓮寺窯跡と

ともに、陶邑窯に起因するものであろうとしている。[20]

筆者が須恵器の形態と技法の検討によって、陶邑窯との共通性を指摘したのと同様に、器種構成のあり方から同じ見解を述べている。朝鮮半島での、地域的な差異の確認や、高蔵七三号窯がどれほど日本化しているかといった問題点は多く残るが、筆者も基本的には賛同するものである。

この説を借りるならば、陶邑窯のＴＫ七三型式以後の須恵器と共通する特徴をもつ各窯跡出土の須恵器は、完全に日本化された段階のものといえ、ましてや、朝鮮半島に直接的に結びつけるわけにはいかないのである。朝鮮半島に直接的に系譜する場合は、その形態や技法・器種構成といったものが、総合的に判断して、彼地のものと区別できないほど類似していることが必要である。

こうした場合に、これまでの「多元論」は、大幅な修正を必要としてくる。現在のところ、陶邑窯とは系譜を異にして成立したと考えられるものは、北部九州の一群と、大阪府一須賀二号窯[21]、吹田三二号窯跡[22]である。これまでのように、初期須恵器の段階の窯が、全て系譜の異なるものであるといったことは、とうてい成り立たないし、かなり違った組み立てになってくるのである。

本来「多元」とは、多くの本源・出発点があるという内容であるが、こうした場合には、必ずしも適切な用語とは言えない。これらの窯跡は、短期間のうちに操業が停止されたり、また、短期間のうちに陶邑窯に準ずる形で、日本化しているのであって、本来の系譜をさほど継承していないのが現状である。

本源が異なるものであれば、それは独自の形で発展・変化することは充分に予想できることである。しかし、そうした特徴は、多少存在するとはいえ、初期須恵器の段階の窯跡では、均一化した形で製作されたものが多く、系譜を異にして独自に発展しているものは少ないのである。一つには器種構成においてであり、そして個々の形態・技法の面において窺えるのである。

各地域において、陶邑窯とは多少異なる形態・技法が存在しても、それは、日本化後の変化か、別系譜の要因かを判断しなければならないが、それは、遺物の総合的な検討によってなされるべきである。そうした点において、前述したように、現在の「多元論」は大幅な修正を必要とするのである。初期須恵器の段階の窯跡は、無秩序に系譜を異にして成立するのではなく、系譜を異にする窯跡は、ごく限られた地域に小規模な形で成立している。それは、現在のところ、北部九州と、大阪平野の周辺部に限られるのである。

## おわりに

初期須恵器の段階の窯跡は、前掲したようにいくつか存在している。近年、それらの窯跡は、その殆どが、陶邑窯とは系譜を異にして独自

に成立し、その系譜は、直接的に朝鮮半島に由来し、渡来した工人によって生産が開始されたとする「多元論」が提唱されるに至った。

小稿は、そうして成立した窯が存在することは認めつつも、必ずしも全ての窯跡が系譜を異にするのでなく、ごく限られた地域に留まるという点を説いた。これまでは、出土遺物を比較する場合、陶邑窯との相違点のみが重視される傾向があったが、筆者は逆に、陶邑窯の須恵器との共通点・組成等を整理・検討することの重要性を強調して述べたのであった。

また、各地域で成立した窯跡において、日本化した段階の須恵器を伴う場合は、当然のことながら、陶邑窯を含めた国内からの伝播・波及を考えなければならない。日本化した須恵器が、直接的に朝鮮半島に由来するはずがないのである。

もちろん、系譜を異にして生産を開始した窯跡が存在することは、再三述べているように、明らかな事実である。また、他の地域においても、今後発見される可能性は充分にある。[23] しかし、こうして成立した窯と、国内で展開・波及したものとは明らかに区別されるべきであり、混同するのは絶対に避けなければならない。両者を明確に区別した上で、論議する必要性を、繰り返して強調しておきたいのである。

各地域の須恵器生産は、この両者のいずれかによって成立していることは明らかであるし、この様相を区別して組み立てていくのが、日本の須恵器生産の成立と、展開を考える上で必要であることは言うまでもない。小稿では、こうした様相を組み立てるまでには至っていないが、陶邑窯を含めた国内からの波及・影響によって成立する波及型と、突発的に系譜を異にして成立する突発型に整理して、突発型は、短期間のうちに消滅するものと、陶邑窯に見られる日本的な須恵器に短期間のうちに変換するものに分け、今後検討していきたいと考える。

全国的な須恵器の均一化と、供膳・使用形態の定型化は、土師器に見られる様相と比較してかなりの違いがある。そこには須恵器生産の規制や統制があったことも予想できるし、そうした場合の中央と地方の問題や、社会組織の関わりが重要になってこよう。

さらに、渡来した人々の跡を示す、韓式系土器などの遺物や出土遺構、およびその分布と渡来工人との関係の検討も必要であるし、[24] 全国で確認されている初期須恵器のなかに、陶邑産のものがかなり確認されているといった、従来の一元的供給に準ずるあり方も、再度論じられなければならないと考えている。[25]

[付記] 拙稿は、本学文化財学科教授であられた、井上薫・毛利久両先生の御退職記念論集の片隅を汚す小文として草したものである。しかしその志しの半ば、毛利久先生は一九八七年九月一〇日、療養生活のかいも空しく、論集の刊行を待たずして他界され、図らずも拙稿が追悼論集の一部を埋めることになった。追悼論文にしては、あまりにも拙い内容をお許し頂くとともに、温和な御性格の中にも、厳しい

学問の研究姿勢の在り方を我々に教えて頂いた、毛利久先生の御冥福を心よりお祈り申し上げる次第です。

小稿を記すにあたりまして、次の方々・機関より資料見学の御配慮、有益な御教示を頂きました。記して感謝申し上げます。斉藤孝正、荒木　実、相田則美、松本敏三、斎藤賢一、平安学園、荒木集成館、名古屋大学、瀬戸内海歴史民俗資料館。

註

（1）田辺昭三「須恵器の誕生」『日本美術工芸』三九〇　一九七一年。

（2）田辺昭三「須恵器生産の開始と展開」『日本美術工芸』三九一　一九七一年。

（3）渡辺泰伸ほか『陸奥国官窯跡群』Ⅱ（『古窯跡研究会研究報告』第4冊　古窯跡研究会）　一九七六年。

（4）荒木　実ほか「東山二一八号窯の古式須恵器について」『古代人』第三三号　一九七八年。

（5）七原恵史ほか『尾張旭市の古窯』　尾張旭市教育委員会　一九七八年。

（6）松本敏三「讃岐出土の須恵器　宮山窯跡の須恵器」『瀬戸内歴史民俗資料館年報』七　一九八二年。

（7）斉藤孝正「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部論集』ＬＸＸＸⅥ　史学二九　一九八三年。

（8）松本敏三「四国地方」（『日本陶磁の源流』須恵器出現の謎を探る　第二章　柏書房）　一九八四年。

（9）平田定幸「朝倉の初期須恵器窯」（『甘木市史資料』考古編　第三章第二節　甘木市）　一九八四年。

（10）いわゆる「多元論」の名称は、橋口達也氏が田辺昭三氏の「陶邑窯からの一元的な供給」とした見解に対して、須恵器生産は各地で「多元的な開始」をする、として述べたことに始まると考えられる。橋口達也「北部九州における陶質土器と初期須恵器」（『古寺墳墓群』Ⅱ　『甘木市文化財調査報告』一四　甘木市教育委員会）　一九八三年。

（11）近年、夜須町教育委員会によって、小隈窯跡の調査が行われると聞く。

（12）植野浩三「西日本の初期須恵器―三ッ城古墳の須恵器を中心にして―」『奈良大学紀要』第九号　一九八〇年。

（13）田辺昭三「初期須恵器について」（『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　平凡社）　一九八二年。

（14）橋口達也『池の上墳墓群』（『甘木市文化財調査報告』五　甘木市教育委員会）　一九七九年、同『古寺墳墓群（『甘木市文化財調査報告』一四　甘木市教育委員会）　一九八三年、柳田康男『小田茶臼塚古墳』（『甘木市文化財調査報告』四　甘木市教育委員会）　一九七九年。

（15）前掲　橋口達也「北部九州における陶質土器と初期須恵器」（『古寺墳墓群』Ⅱ『甘木市文化財調査報告』一四　甘木市教育委員会）　一九八三年。

（16）前掲註（7）。

（17）前掲註（8）。

（18）中村　浩「須恵器生産の諸段階―地方窯成立に関する一試考―」『考古学雑誌』第六七巻第一号　一九八一年。

（19）岩崎直也「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第三九巻第四号　一九八七年。

（20）山田邦和「須恵器生産系譜論の現状」（同志社大学考古学シリーズⅡ

『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズ刊行会　一九八五年。

(21) 大阪府教育委員会『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』　一九六九年。

(22) 藤原　学『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』昭和六〇年度　吹田市教育委員会　一九八六年。

(23) 今後そうした可能性のある地域として、和歌山県・岡山県・愛媛県、他があげられる。こうした地域で出土した須恵器（陶質土器）のなかには、陶邑窯にはない形態や装飾、胎土が違うものが存在しており、窯の存在が推定できる（武内雅人「和歌山県における発生期の須恵器窯」『和歌山県埋蔵文化財情報』一七　社団法人和歌山県文化財研究会　一九八五年、島崎　東「岡山県の初期須恵器について（予察）」『古文化談叢』第一六集　一九八六年、愛媛県の状況は、相田則美氏御教示による。愛媛県出作遺跡では、陶邑窯と共通する形態・技法をもつものと、異なるものが共存して出土している）。また、各地の古墳において、窖窯を用いて焼成したと考えられる埴輪が多数出土しているが、それは以前にも触れたように、（前掲註12）、須恵器を同時に生産している可能性をもっている。しかし、この事実が直接的に系譜を異にするという解釈にはつながらないのである。

(24) 韓式系土器の出土は、近畿・九州地方を中心にして全国的に認められてきている（植野浩三「韓式系土器についての予察」『奈良大学紀要』第一二号　一九八三年、韓式土器研究会『韓式系土器研究』Ⅰ　一九八七年、埋蔵文化財研究会『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』　一九八七年）。特にこのなかで、軟質系土器は、渡来した人々の直接的な痕跡を示す資料ということができるし、須恵器工人を含めた渡来人の流入のあり方を説く手掛かりになると考えられる。

(25) 三辻利一氏を中心とする須恵器の産地同定の成果によれば、岩手県から鹿児島県に及ぶ広い範囲に、陶邑窯の製品が認められるという。これは、かつて一元的供給といわれたあり方に準ずる形とも言え、あらためて陶邑窯の位置付けを行う必要があるのである。さらに、重要なことは、初期の須恵器窯が存在する地域においても、陶邑窯の製品を認めることであり、「多元論」との関係を整理しなければならないのである。同様なことは、楢崎彰一氏も述べられており、系譜を異にするという地方窯の成立が、即、陶邑窯の一元説の崩壊と捉えるべきではないとされ、色々な要素を検討していくべきであるとしている（楢崎彰一監修『日本陶磁の源流』須恵器出現の謎を探る　第三章　柏書房　一九八四年）。